

2020年4月24日

新刊ニュース

今回は書籍ばかりをご紹介します。

* 礪山雅著「ヨハネ受難曲」 筑摩書房

一昨年、非業の死を遂げられた礪山氏のライフワークであるバッハ研究の遺稿です。出版を見ることなく帰天されてしまいましたが、このたび筑摩書房から刊行されました。すでに「マタイ受難曲」は上梓しておられましたが(当資料室所蔵)、バッハがそれより先に作曲しているヨハネには演奏のたびに手が加えられる複数の版が存在して問題を複雑にしているために執筆が遅れたとのこと。礪山氏はマタイを書いた時の反省から、ヨハネに着手する前にギリシャ語を勉強しておられます。それはルター訳の聖書を批判的に読めないままにマタイについて執筆したからということ。氏はドイツでバッハが所蔵していた神学書を熱心に研究しておられました。キリスト信徒ではない学者の真摯な情熱的な研究態度に私は大きな示唆を受けます。

* マークス・ラータイ著、木村佐千子訳「愛のうた；バッハの音楽作品」 春秋社

これは今年度の「辻壮一賞」を受賞した本です。受賞作品は音楽書に関してはすべて購入することになっております。ちなみに辻壮一賞というのは教会音楽に学問的分野で貢献した人に与えられる賞です。今回は翻訳者の木村氏に与えられました。ところで訳書ですので原題は何かと言いますと直訳すると「バッハの主要音楽作品；音楽、ドラマ、典礼」ということになるのですが、これをまとめてあえて「愛のうた」と題して日本語版を出したところがユニークです。それはラータイ氏が神学の知識を活かして、「愛」という視点から音楽作品に光を当てたからだと言者は書いておられます。訳者の斬新なアイデアです。愛の歌というと男女の愛を歌ったものをすぐに連想してしまいましたが、人の愛の前提には神の愛があるということ、このタイトルから気づかされました。

* 杉本ゆり「初期フランシスカンにおける音楽」 長崎純心大学キリスト教文化研究所

これは書籍ではなく紀要論文の抜き刷りです。イタリア音楽史の出発点にいるアッシジの聖フランシスコとフランシスコ会が宣教にもちいたラウダという中世の宗教歌謡について起源から写本成立までを扱っています。

杉本ゆり記